

# 2024年度 入学試験 国語 問題冊子

早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

## 注意事項

1. 問題は、本冊子の p. 1～p. 26 となります。
2. 解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
3. 「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
4. 監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
6. 解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
7. 「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
8. 問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。

### ※ 解答上の注意

文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさと濃く）記しなさい。  
字画（文字を構成する点や線）は、省略せずに楷書で記すこと。  
認識できない乱雑な文字は、不正解もしくは減点の対象となります。

受験番号						氏名





□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

オウム真理教（以下「オウム」と略称）の頭目、信徒からみれば「尊師」松本智津夫氏の一番判決が出た機会に、多くの意見が新聞雑誌にあらわれた（たとえば「朝日新聞」二〇〇四年二月二十八日）。それを読みながら、私は今からおよそ十年ほど前地下鉄サリン事件当時に大衆報道機関にあふれた関連記事を思い出した。そこには私にわかりにくい話が少なくない。殊にたとえば「オウム」信徒に理科系の<sup>（注）</sup>高等教育を受けた人が多いのを不思議だとする意見である。なぜ不思議なのか。

不思議にみえるのは、おそらくそこに <sup>1</sup> **概念上の混乱**があるからである。信徒に多かったのは科学者ではなくて、科学的な知識をふまえた技術者である。論者はその区別を常に明瞭に意識してはいない。また科学者や科学的技術者の過大評価というところもあるらしい。たとえば医者<sup>（注）</sup>は病気について素人の知らぬことを知っている。しかるに「オウム」の言説は、誰の眼にもあきらかに、現実離れのした不合理な話である。そういうばかばかしい話をわれわれ以上に理解力のあるはずの医者がなぜ信じたのか。医者は専門家である。専門家にその専門領域以外の事柄についても、彼らの「高学歴」が一般の市民以上の判断能力を保証するだろうと考えるのは、過大評価にすぎない。

しかしそれだけではない。「オウム」は新宗教の比較的小さな団体である。信徒となった技術者は、集団の目的のために、すでに知られている技術を用いたにすぎない。そこには何らの技術的改良もなく、いわんや科学的発見もなかった。しかしそういう小さな団体ではなく、強大な国家が当事国を除く世界中の誰の眼にもあきらかな、途方もない計画を追求することがある。東アジア全域への国家神道の強制、ヨーロッパ全土からのユダヤ人の一 <sup>a</sup> ソウ、全知全能とされる独裁者の下での一国社会主義の建設、そしていくら探しても見つからぬ大量破壊兵器の脅 <sup>b</sup> イを除くためのイラク <sup>c</sup> トウ伐……。それぞれの国民のなかには、単に高等教育を受けた層ばかりでなく、多数の傑出した科学者や技術者が含まれていて、彼らの知識と能力もまたばからしい計画を実現するために動員されたのである。科学技術者と **A** 的狂気とは、「オウム」の場合にかぎらず、

必ずしも相互に不適合とはいえない。

そして科学技術者の行動ばかりでなく、多くの点で、国家のように大きな社会が極端に不合理な目的を追求する時には「オウム」の行動様式に似て来ることがある。「オウム」はある時期の日本国の縮図でもあり戯画でもあるだろう。それが不可解で、不思議だとすれば、われわれ自身の見てきた二〇世紀前半の日本社会が、不可解で、不思議だということになる。

そもそも <sup>2</sup> 「オウム」の特徴はどういうものであったか。

新宗教としての教義は、ヒンドウイズムやキリスト教から多くを借りた折衷主義である。その意味では、近代日本の新宗教の **B** 的多数に著しい折衷主義の例外ではない。しかし神仏習合の折衷主義の長い伝統を超えて、国家神道を組織化したようにした国家とは異なる。

「オウム」教団の組織は、指導者を中心として、信徒の強い結束を特徴とする。「和」を貴び、全会一致を強調し、少数意見を排除する。集団帰属制の軽視に対する「オウム」の「ポア」（殺害）は、かつての日本の「それでもお前は日本人か」の極端な反映とみなすことができるだろう。指導者は神聖にして冒すべからず、ほとんど「生き神」であり、「オウム」では超能力さえも持つとされた（坐したまま空中に浮遊、水中で長く息をとめることなど）。

信徒のための修辞法は非合理的な誇張を含み、戦時中の日本の「神風」待望論や「死して護国の鬼」の永久戦争論を想 <sup>d</sup>キリさせる。

対外的には日本社会のなかでの「孤立」。三〇年代、国際連盟での「名誉ある孤立」を思い出させる。「孤立」は、自己の正当化さらには人格化、他者の理解力の極端な欠如、したがって対話の可能性の喪失の結果である。初めから外部世界との緊張を含み、緊張関係への対応は、守勢から攻勢に転じる。すなわち中国侵略戦争の拡大、またはサリン散布。

暴力の「エスカレーション」（戦争、テロリズム）は必ずしも集団内部の独裁体制を前提としない。民主主義的体制内での「多数の暴政」からもおこり得る。

X ここではその縮図の上に科学技術者の役割を位置づけることが問題である。集団の非合理性と科学技術の合理性とはどう関係するか。

集団の側は、科学者、技術者、哲学者、さらには一般に知識人の協力を二重に必要とする。第一に、体制それ自身とその目的を正当化するためには歴史家や社会科学者の協力に俟たなければならぬ。第二に、目的達成のための有効な手段を手に入れるには技術者に頼るほかない。

科学技術者の側では、高度の専門化が進んでいる。専門領域では、研究室の中に合理的かつ C 的な思考が支配しているが、研究室の外にその思考の習慣はもち出されない。しかるに研究の究極の目的は専門領域外にあるから、それがどれほどばかげたものであっても、それを合理的な立場から批判することがない。

集団と技術者の側におけるこのような条件こそ、サリンを作り、それを使っての犯罪を可能にしたのである。どうすれば、再発を防げるだろうか。合理性の個室と非合理的信念の個室との障壁をとり払えばよい。そのためには科学的個室で養われた合理的思考を、いづどこでも e テツ底的に貫くほかないだろう。一方で合理的な思考の限界を自覚し、他方で信仰の世界を水でうすめ、和を貴ぶ「こころ」でしめくくるといようなめでたい話を、私は信じない。

(加藤周一『夕陽妄語』による)

(注) 1 高等教育——学校教育の最高段階の教育。日本では、大学・大学院などの教育を指す。

問一 二重線部 a 「(一)ソウ」・ b 「(脅)イ」・ c 「トウ(伐)」・ d 「(想)キ」・ e 「テッ(底)」について、同じ漢字を用いるものとして正しいものを、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 一ソウ

ア 事件のソウ体が見えず、状況判断が難しい。  
 イ 莫大な財産のソウ続でいさかいが起こっている。  
 ウ 朝一番から大ソウな人手だ。  
 エ 問題のソウ点がようやく見えてきた。  
 オ 一流のホテルでは清ソウが行き届いている。

b 脅イ

ア 現代社会はコンピューターにイ存している。  
 イ 圧的な態度を取るの望ましくない。  
 ウ 自然の営イは人間の力では対抗しがたい。  
 エ ついに皇帝が退イすることとなった。  
 オ 特にイ論がなければ会議を終了する。

c トウ伐

ア 親の意向が子供にトウ影されている。  
 イ トウ価交換であれば全く構わない。  
 ウ 地震で家屋がトウ壊する。  
 エ 納得のいく答えが出るまでトウ論する。  
 オ 彼がトウ角を現すようになったのは最近だ。

d  
想キ

ア 会社で新しいキ|画が立ち上がった。  
イ 世界中のキ|餓で苦しむ人々を救いたい。  
ウ キ|幹産業が低迷すると景気は悪化する。  
エ 彼の一言が事態が動くキ|点となった。  
オ 強敵との試合をキ|権することにした。

e  
テッ底

ア 公正であることをチームのテッ|則としている。  
イ 祭りで使用した機材を全てテッ|収する。  
ウ 彼は一テッ|な性格で信念を曲げない。  
エ 失敗を理由に役職を更テッ|される。  
オ テッ|壁の守備を武器に野球大会で優勝する。

問二 空欄    を補うのに最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。  
ただし、同じ語を繰り返し用いてはならない。

- ア 効果      イ 圧倒      ウ 実証      エ 感覚      オ 集団

問三 空欄  には、次のア～ウの文が入る。これらを最も適当な順序に並べ替えなさい。

- ア しかしここでは立ち入らない。  
イ その枠組みは日本だけではなく、他の社会（ナチのドイツ、スターリン体制、また朝鮮民主主義人民共和国など）の理解のためにも役立つかもしれない。  
ウ このように多くの点で、もちろん相違点もあるが、「オウム」は二〇世紀の日本の歴史の、少なくともその一面の、縮図である。

問四 傍線部1「概念上の混乱」とあるが、これはどういうことか。その説明として適当なものを、次のア～オの中から二つ**選び**、記号で答えなさい。

ア 一般に、科学的発見も可能とする科学者と、単に科学的知識をもつだけの技術者とを混同していること。

イ 科学者や科学的知識をもつ医者などの専門家が、専門領域以外の事柄についても一般市民以上の判断能力を有するだろうと考えられていること。

ウ 理科系の高等教育を受けた専門家であっても、一般の市民以上の理解力や判断力がある訳ではないと思いついでいること。

エ 「オウム」信徒は平凡な技術者であったに過ぎないのに、優秀な科学者であると信じていること。

オ 信徒であった科学者たちが、「オウム」の言説のなかの真理と虚偽とを区別できないでいること。

問五 傍線部2「オウムの特徴」とあるが、これはどのようなものか。その説明として誤っているものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ヒンドウイズムやキリスト教から多くの要素を取り入れた「オウム」は多くの近代日本の新宗教と同じ折衷主義だといえるが、国家神道の組織化を図った国家とは異なる。

イ 信者たちが、指導者に反することはもちろん、全体の考えと少しでも異なることは許されず、そうした批判精神の欠如は、集団の暴走につながっていく。

ウ 教団によって言われている内容には、戦時中の日本で支配的であった、「神風」待望論や「死して護国の鬼」の永久戦争論などの思想と同様、誇張された非合理性が含まれている。

エ 集団内部の独裁体制を必須とする、暴力のエスカレーションである戦争やテロリズムは、少数意見を尊重しない民主主義的体制でも同様に起こりうる。

オ 非合理的な集団の目的を達成するための手段として科学技術者を利用するという構造は、「オウム」や日本、その他の国家や社会にも共通して見られる。



問七 本文の内容に合致するものとして適当なものを、次のア～カの中から**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア 小さな集団よりも、不合理な目的を追求する大きな集団の方が、科学技術者により強く結びつく傾向がある。

イ 集団への帰属を強要し、時に暴力を用いて異質な他者を排除する体質は、日本の精神の伝統が根強く残っている証拠である。

ウ 対話の可能性を喪失した集団と外部世界との関係は、初めから緊張を含み、その緊張関係への対応は、外部世界からの防御から外部世界への攻撃へと変化する。このような様相は、日本による中国侵略戦争の拡大や「オウム」によるサリン散布に認められる。

エ 宗教集団のような小さな集団であれ、国家のような大きな集団であれ、民主主義的体制を構築することで、集団の暴走を防ぐことができる。

オ 狂氣的集団が、科学技術者の協力を必要とするのは、集団の存続やその目的の遂行という直接的な理由に加えて、社会的に認知されている科学技術者を利用することで、集団への信頼を高めるという間接的な理由もある。

カ 批判的な思考と信仰心とは本来相容れないはずなのに、何れも中途半端なままにして、表面的な整合性を取り繕うことは、看過できない。

〔二〕 次の文章は、島尾敏雄「出発は遂に訪れず」の一節である。第二次世界大戦のさなか、ある島で特攻隊(注1)の隊長として従軍していた「私」は、八月十三日に司令官から特攻戦発動の命令を受け取った。しかし発進の合図がないまま、数日が経過しようとしていた。これを読んで、後の問いに答えなさい。

先任将校のK特務少尉が、外出から約束の時刻を無視して帰宅した夫を迎える妻の顔付で棧橋に立っていた。防備隊での様子をいち早く知りたがっている彼の目に私は総員集合をかけることを要求してすぐ本部の自分の部屋にはいった。

入江の夕暮れどきの静けさは、集合の騒ぎでにわかにかき乱されたがやがて規則的な号令のあとで、またもとの静寂に返った。三角地帯のかなめのあたりに設けられた本部から渚に近い広場までの傾斜地には甘薯かんしよが作られそのあいだを縫うようにこしらえたソテツ並木の坂道が、総員の集合した場所に出て行く私の前に横たわっていた。珊瑚虫さんご石灰骨片の小石をしきつめた広場は百八十人の隊員が集まるとあといくらかも余裕がなく、渚とのあいだに生垣を設けた具合に生えたユナギとアダンの叢生そうせいを背景にして整列した隊員たちが長方形の隊形の中で顔を重ねていた。彼らの一人一人が予感や情報の中でどんな思索の中に投げ込まれているか私に分るわけではない。用意された台の高さだけの展望から眺めおろすと、加速度を増して暗さを重ねてくる夕やみの中でも、まだその表情をはっきりとらえることができた。そのどの顔も私が今伝えようとしていることばに渴いている熱っぽい集中があった。

「達する」と 1 こころみの中に身をまかせる気持で私は言った。

「天皇陛下におかせられてはポツダム宣言を受諾することを御決意になり、本日、詔書しやうしよを渙発かんぱつなされた。つまり我国は敵国に対し無条件降伏をした。各隊はただちに戦闘行為を停止しなければならぬ」

隊伍の中にかすかな揺れがあった。何かを待ち受けるように、私はいったんそこでことばを止めた。静寂がつづく中で、何人かの隊員の顔が個性を思い起させながら、私の意識にはいった。それは年若の者と年配の者が交錯していたが、その瞬間後者の面上に安堵あんどの色が浮んだのを見のがすことはできなかつた。それはすぐ消えたがその気配は隊伍を縫って結び合い、もや

のように全体を包んだと感じた。私はそれを予想してはいなかった。幾つかの個性が、鋭角な抵抗感を湧きたたせていることも感受できたが、それはひどく孤独なすがたをしていた。

「われわれは宣戦の詔勅しよくちよくによって戦争に参加した。従って終戦の詔勅が下った以上、それに従わなければいけない。決して個人的な感情で軽々しい行動に出てはいけない」

言いながらそれはごまかしだとささやく自分がいた。もしここで、こうではなく詔勅に反して特攻出撃の決意を発表したらどうだろうと考える自分もいた。しかし年配の隊員の表情にはほっとなり、自分の論理に従えずに落ちて行く感じの中で、無理におし出すように先を続けた。「正式な講話の交渉がいつはじまるかは分らないが相当長期間われわれはこのままの生活をしなければならぬと考えられるから、当分のあいだ従来のままの日課を行う。なお一言注意しておく、特攻戦に対する即時待機の態勢はまだ解かれてはいないから間違わないように。X 信管（信）も、挿入したままにせよ。戦闘停止ということはあくまで暫定のものだから、もし敵艦が正式な交渉を待たずに勝手に海峡内に侵入して来ればわが隊は直ちに攻撃する。そのつもりで気持ちをゆるめないように」

ひどい疲れが私を襲い、部屋のベッドに仰のけになった。危惧した事態のどんな徴ちようこう候もなかったからその限りにおいても案ずることは何もなかったのに、<sup>2</sup> 言いようのない寂寥せきりようが広がっていた。時点が移ってしまえば、想像することさえ禁じていた、死の方に進まなくてもいい生きのびられる世界は、色あせてありふれたものにしぼんでしまい、そこで手ばなしで享受できると考えた生の充実は手のひらの指のすきまからこぼれてしまったのか。装われた<sup>a</sup> 詭弁ぎべんがあとくち悪く口腔こうこうを刺激し、生きのびようと<sup>b</sup> 腐心ふしんする私を支える強い論理を見つけ出すことができない。戦争と軍隊に適応することを努めその中で一つの役割を占めたことよって出来かけていた筋道を、生きのこることよって否定したことになるれば、それでそれ以前のもとの場所に帰ったことになるか。しかしその考えは私を少しもなぐさめない。生きのびるためにそのとき適宜にえらぶ考えは、環境の大きな曲り目のたびごとにまたえらび直さなければならなくなり、とどまるところなく繰返されるにちがいない。刻々の嫌悪感の中でだけ反応してきた過去が、空襲と突き当たるときの想像と抗命をおそれ、それらの可能性が

自分の意志の結果としてではなく、自然現象のように去ってしまおうと、そのあとに空虚が居残り、新たな局面に出かけて行って対処するエネルギーが生れてこない。

おそい夕食が用意されて酒も配られた。食卓についた准士官(注4)以上は、まださぐり合う猜疑心(さいぎしん)でお互いを伏目がちな姿勢にさせた。何と言っても覆うことのできない虚脱がそこにあった。ちようど電信員が傍受した情報もたらされ、それが披露されたとき、前任将校が口をほどいておさえていた気持をぶちまけてしまった。情報は大分にいた特攻司令長官が詔勅の放送をきいたあとと自分自身一番機に乗りほかに八機を従えて沖繩島の中城湾(なかぐすくわん)に最期の特攻突入をかけたことを伝えていた。それは

<sup>3</sup> 私に強い衝撃を与えた。前任将校の声が無条件降伏のだからしのないこととヤマトダマシイの喪失をなげき、特攻機で多くの部下を殺した特攻長官の最期の態度を武人の手本だとたたえた。酔いが同じことを彼に繰返させたとき私は口を入れないですますことができない。「もし何ごとかを本気で決意している者なら、きっと何も言わずに黙っていてやるだろうな」彼は目を光らせて黙り、食堂兼用の士官室に気まずい空気が流れ、私は自分の部屋にもどってベッドに横たわっていた。

それぞれの兵舎の方角や広場のあたりからも、ざわめきが伝わり、時おり誰かが大声で叫ぶのがきこえた。効果のないことと知りつつ最期の特攻突入をかける姿勢は、私にも栄光につつまれて見えた。でもそれを口にすれば、危機をすりぬけたみじめさをいっそうかきたてることになるから、そうするわけには行かない。それを彼が繰返して言っていると嫌悪がわき、それは私の今までのやり方への非難を含んでいるように思えた。いつわりが少なく意志的な彼のよごれない態度に魅(ひ)かれながら、一番強い反撥(はんぱつ)を感じてしまう。しかし彼がもつと強く私につつかかかってこなかったことに安心しながら彼を値ぶみしている自分が解(げ)せない。もしかしたら、武人の本分を楯にし与えられた特攻の目的を変更せずに貫くために突入を私に強いるかも知れぬと考えていたのに。しかし彼はそれをせずついに酔いにまぎらせて鬱憤を散らしたただけだ。えたいの知れぬ一つの悲痛が、隊を襲っていることに、やがて私は気がつかなければならぬ。

うつらうつらしたと思ったとき前任下士官が腰をこごめてはいってきた。

「おやすみのところよろしゅうございますか」

と彼は言った。いつものおとなしい彼と少しちがっているところが見えた。酒気をおびたからだをふらつかせながらベッドのそばに来てうづくまり、隠していた思想を打ちあけるふうにしやべりはじめた。

「少し酔っていますがかんべんして下さい。でも隊長にはどうしても一度お話ししたいと思っていました。お話ししてもよろしゅうございますか」

と念をおすので、私はかまわないといった。

「わたしたちがどんなに苦勞をしてきたかあなたには分かりませんですよ。今こうしてわたしが上等兵曹にまでこぎつけたのに何年かかったと思いますか？ 十年ですよ。十年もわたしは軍隊というところで青春をすりへらしてしまっただんです。それでようやく上等兵曹です。もっともあなたにとって上等兵曹など別に何ということもないでしょう。あなたはご自分では気がつかないでしょうが、わたしから見れば、こう言っちゃ何ですが幸福な境遇ですよ。何不自由なく最高の学府を出してもらって。そうでしょ。わたしは知っておりますよ。申し上げてみましょうか。御尊父は絹織物輸出貿易商をなさっておられるでしょう？ わたしは隊長のことは何でも知っていますよ。おどろきましたか」

「絹織物輸出貿易商じゃない。輸出絹織物商だよ」

「おや、まちがいましたか。とにかくお金持のお坊ちゃんにはちがいないですよ」

「私の家はそんなものじゃない」

「でもわたしの家とはくらべものになりませんですよ。わたしの家は小学高等科に出してくれる余裕もなかったですよ。あなたは海軍においてになってからまだ二年もたっておらんにやがて大尉に昇進なさる時期に来ていなさるのですからねえ。おこらないで下さいね。おこつて下さると困ります。お気にさわりますか。しかしこんなことはつまらんことです。日本は負けてしまったんです。テイコクカイグンなんかふっとんじまったんです。海軍上等兵曹も何の役にもたたなくなりました。あなただから言いますがね、実はこうなることをわたしは予想していました。最近の海軍は昔のテイコクカイグンとすっかり様子がちがってしまいました。これでは戦争に勝てっこないですよ」

「私は昔の海軍は知らない」

「いえ、それはわたしだって隊長のあとにつづいて立派に突撃するつもりでした。でも何だかこんなふうになるのじゃないかと思っていました。わたしは本当は軍人などに向きません。これからわたしは家に帰ったら百姓をやりながら好きな発明の研究に没頭したいと思っています」

「ハツメイ？」

と私はききかえした。

「……の発明です」

彼は目を輝かせて言ったが、何の発明か私にはききとれなかった。

「今でも課業のひまにその研究をやっておりますよ。わたしはそれさえしていればほかに何のたのしみもありません。隊長は御存じなかったのですか。すっかり分っておられると思っております。もっとよく部下の身の上を知って聞いていただきたいですな。わたしはその研究で特許を一つ持っております。ちゃんと登録された特許権です。今度くくに帰ったらそれを実用化する方法を考えます。女房に手伝わせて、それに没頭するんです」

「それはいいな。私は何をしたいか分からない」

と私は言った。

「隊長、あなたは帰れるつもりでいるんですか」

と彼は急に声を殺して言った。

「……………」

「今度の戦争の責任は、士官がとらなければなりませんよ。下士官兵には責任はありません。士官とはそういうものです。今までそれだけの特権が士官には与えられてきたのですから。あなたはいくら期間が短く、また予備士官であつても、お気の毒ですが士官としての責任をとつてもらわなければなりません。それにアメリカ側が必ずそれを要求してきます。私は長いあ

いだ軍隊でくらししてきましたからそのところがよく分るのです。覚悟しておかれないといけませんよ。士官は全部処分されるかも分りません。そうでなければこれほどの大きな戦争のあとのおさまりのつくはずがありません」

彼のそのささやきのことばは妙に真実性があつた。

「へんなことを申し上げましたがお氣になさらんで下さい。どらわたしはこれからヘイタイたちがばかなまねをしないかどうか見まわって参ります。そっちの方は御心配なさらんでこのわたしにおまかせください。どうもどうもおじゃましました」と彼は二、三度腰を折って辞儀をした。そしてふらつく足で入口のところまですぎり、そこでもう一度深い辞儀をした。

「ではごゆっくりおやすみください」

彼はそう言つて出て行つた。

4 のこされた私は氣持がふさいだ。 唐突に「毒を仰ぐ」という熟語が浮んだりした。それは私にできそうなばかりでなく、自分にふさわしい語感があつた。私は起き上つて日本刀を取り、それをベッドの中に入れた。考えられもしない変化の中でせつかく生きられる状態が出現したのに、それを完全に自分の手の中に収めるまでにはなお多くの難関が横たわっていることにつかりした。もし刀を抜かなければならぬときは抜こうと心に言いきかせた。拳銃は持っていないが拳銃でない方がその場合むしろ心に適うかなと思つた。日本刀を抱くようにしてその鞘をさわっていると殺伐な氣持が湧いてきた。この氣持を以前に欲しかつたと思つた。だがいずれにしろ明日になったら Y 何よりも先ず特攻艇の兵器から信管を外はさせよう、と思ひながら私は眠りに就いた。

(島尾敏雄 「出発は遂に訪れず」による)

(注) 1 特攻隊——第二次世界大戦中、敵国の艦船などに対して、体当たり攻撃を行うことを目的として編成された旧日本

陸海軍の部隊。

2 ポツダム宣言——第二次世界大戦末の一九四五年七月二十六日に発せられた日本に無条件降伏を要求する米・英・

中による共同宣言。日本は八月十四日にこれを受諾し、八月十五日に第二次世界大戦が終戦を迎えた。

3 信管——火薬に点火して弾丸を炸裂させるための起爆装置。信管を挿入したままにし、特攻出撃に備えていた。

4 士官——兵を指揮する武官。将校・将校相当官の総称。

問一 二重線部 a 「詭弁」・ b 「腐心」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群のア～オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a  
詭弁

- ア 言いがかりの材料となる発言
- イ 痛切な戒めとなる文言
- ウ 上辺だけで形式的な主張
- エ 道理に合わないこじつけの理論
- オ 議論に値しない意見

b  
腐心

- ア 心を奪われて呆然とすること
- イ 心を痛め悩ますこと
- ウ 心にかない満足に思うこと
- エ 心から今までのことを反省すること
- オ 心して気をつけること

問二 傍線部1「こころみの中に身をまかせせる気持」とあるが、この時の「私」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の発言の後、隊員たちの「私」に対する不信感から隊の秩序が壊れるのではないかと危惧していたが、発表を心待ちにする隊員たちの気持ちに押されて、戦闘行為の中止を伝えることにした。

イ 自分の発言の後、隊員たちが特攻する必要がなくなったと思い込み、日々の訓練を怠るようになるのではないかと思いを悩んでいたが、心を決めて戦闘行為の中止を伝えることにした。

ウ 自分の発言の後、命をかけて戦ってきたにもかかわらず敗戦したという大きな衝撃に隊員たちが耐えられるのかという心配があったが、楽観的な気持ちで戦闘行為の中止を伝えることにした。

エ 自分の発言の後、隊員たちがポツダム宣言の受諾に反対するのではないかという懸念があったが、隊員たちの雰囲気を見無視して、戦闘行為の中止を伝えることにした。

オ 自分の発言の後、隊員たちがどのような反応をするのか予想できないという不安があったが、自分に向けられた隊員たちの視線を感じつつ、戦闘行為の中止を伝えることにした。

問三 傍線部2「言いようのない寂寥せきりょうが広がっていた」とあるが、この時の「私」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 軍隊の中で役目を果たすことに必死になっていたにもかかわらず、命じられた戦闘行為の中止によって、突如眼前に開かれた世界で生きる指針を見失い、茫然としている。

イ 無条件降伏の発表に対して、様々な思いを抱えている隊員たちの気持ちに寄り添うこともできずに、厳しい言葉をかけてしまった自身を省み、自己嫌悪に陥っている。

ウ 詔勅の発表後に、危惧していたような終戦への反発はなかったものの、「私」と同じような特攻への強い意志が隊員たちの間にはなかったことを実感し、孤独を感じている。

エ 生きのびたいと考えていたはずなのに、突然の終戦の決定に対しては、詔勅に反して特攻出撃の決意を發表したくなるという自身の奇妙な心境を理解できず、葛藤している。

オ 皆が待ち望んでいた戦争の終了を素直に受け入れられず、自身のプライドを支えていた特攻隊の「隊長」という地位がなくなることへの焦燥感に駆られている。

問四 傍線部3「私に強い衝撃を与えた」とあるが、この時「私」はどのように思ったのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先任将校が、無条件降伏後に特攻突入攻撃を行なった他の部隊のことを隊員たちの前で賞賛したことによって、先任将校や隊員たちが、「私」にも特攻の指揮を執るよう要求するのではないかと思った。

イ 先任将校が、日本の無条件降伏を批判するような物言いをしたことで、隊員たちの間に日本国政府に対する反抗心が芽生えてしまうのではないかと思った。

ウ 先任将校が、大分の特攻司令長官の振る舞いを称えたことで、隊員たちが、何も決意できないでいる「私」に対する不信感を募らせるのではないかと思った。

エ 先任将校が、効果がないと知りながらも特攻突入をかけた特攻長官の最期の雄姿を、隊員たちに語ったのを見て、「私」の役目を先任将校に取られたと思った。

オ 先任将校が、隊員たちの士気を高めようと熱弁をふるうのを見て、詔勅に反して特攻出撃の司令を出そうとする「私」の目論見を先任将校に見抜かれていると思った。

問五 傍線部4「のこされた私は気持がふさいだ」とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 終戦に反抗しているつもりだったが、前任下士官の話によって「私」の中の終戦を待ち望む気持ちに気づいてしまったから。

イ 終戦を迎えるに当たって「私」が自身の置かれた状況を把握できていないことを、前任下士官に指摘されてしまったから。

ウ 終戦後の将来を堂々と語る前任下士官と比べて、「私」が未だ将来の夢を何も持っていないことを突きつけられたから。

エ 前任下士官の話聞いて、「私」がしがついてきた「士官」という地位は、取るに足らないものだ実感したから。  
オ 前任下士官に無礼な態度をとられたことで、それまで大切にしてきた「私」の信念が踏みにじられたような気がしたから。

問六 波線部 X 「信管も、挿入したままにせよ」から、Y 「何よりも先<sup>ま</sup>ず特攻艇の兵器から信管を外<sup>は</sup>させよう」へと至る心情の変化について左記のように整理した（点線で囲まれた部分）。これを踏まえて、空欄 **甲** ・ **乙** を補うのに最も適当な語句を、それぞれ十字以内（句読点等を含む）で補いなさい。

**乙** を補うのに最も適当な語句を、それぞれ十字以内（句読点等を含む）で補いなさい。

X 「信管も挿入したままにせよ」

主な理由……突然の「終戦の詔勅」による戸惑いがあったから。

気持ちや考え……終戦を受け入れられず、いつでも<sup>ま</sup>戦しようと考えている。

←

Y 「何よりも先<sup>ま</sup>ず特攻艇の兵器から信管を外<sup>は</sup>させよう」

主な理由……「先任下士官」との会話を通じて、 **甲** 「士官」である自分と、他の「下士官兵」との置かれた状況（立

場）の違いに気づいたから。

気持ちや考え……自分の身の処し方はな<sup>ま</sup>ておき、 **乙** と考えている。

〈下書き用・十字〉



三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

洛陽大宮通六条に（注<sup>1</sup>） 後家なる者、男子一人を育みて、杖・柱ともたのむ。いとど貧しくしてわたりかねたる世こそうきに、又この子あくまで不孝なり。何事も母の命をそむき、あまつさへざうごんをはく。見る人聞く袖みなにくみて、「ゆくゑよかるまじ」と言ふ。案のごとくこの者十七の夏わがやに昼寝せり。母は隣に茶を飲みにいづる。（注<sup>2</sup>）ひつじのかしらばかりに、「ああかなし」といふ。むかふとなりの人々「何事ぞ」とあはつるに、母もふためきてかへる。さてその（注<sup>3</sup>）せがれを見るに、舌（注<sup>4</sup>）一尺ばかりひき出して命むなしくなる。そのまま引き起こしななどするに、くさき事はかりなし。人々ふしぎの思ひをなす。そのわざ業のなす所にして、人力とは見えず。見たる人たしかに語れり。犬馬にいたるまでよく養ふに、敬せずして悪口をなす。よき舌のぬきものなり。 人つつしまずんば、名は後人の唇上にあそばん。

（『御伽物語』による）

- （注） 1 後家——夫に死に別れ再婚せずにいる女性。未亡人。  
2 ひつじのかしら——時間を表す言葉で、現在の午後二時ごろ。  
3 せがれ——息子のこと。  
4 一尺——「尺」は長さの単位で、一尺は約三〇・三センチメートル。

問一 波線部「ざうごん」を、現代仮名遣いに改めなさい。

問二 傍線部1「杖・柱ともたのむ」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母が息子を丈夫な男に育てあげているということ。
- イ 母が息子を心から頼りにしているということ。
- ウ 母が息子を働かせて生活の糧を得ているということ。
- エ 母が息子の一日も早い成長を願っているということ。
- オ 母が息子に様々なことを要求しているということ。

問三 傍線部2「ゆくゑよかるまじ」とは、どのような言葉か。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近所の人々が、母親に従わず悪口を言い放つ息子に対して言った言葉。
- イ 親不孝な息子が、息子の態度を非難する近所の人々に対して言った言葉。
- ウ 母親が、貧しい暮らしに不満を訴える息子に対して言った言葉。
- エ 息子と母親の言い争いを見た近所の人々が、息子と母親に対して言った言葉。
- オ 近所の人々が、母親を残し一人で都に出ようとする息子に対して言った言葉。

問四 傍線部3「人力とは見えぬ」とは、どのようなことに対して述べているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昼寝をしている息子のあまりの臭さに耐えかねた母親が、息子の舌を切って命を奪ったことに対して。
- イ 昼寝をしている息子の怠惰な様子に憤った母親が、泣く泣く息子の命を奪ったことに対して。
- ウ 昼寝をしようとした息子の口の中に入った得体の知れないものが、舌を引き抜いたことに対して。
- エ 昼寝から目覚めた息子が、周囲の異臭に気づき、苦しみながら絶命したことに対して。
- オ 昼寝をしていたはずの息子が、舌を長く伸ばしたまま突然絶命し、異臭を放っていたことに対して。

問五 傍線部4「人つつしまずんば、名は後人の唇上にあそばん」は、この話が示す教訓について述べているが、その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人は目立った行動をとりすぎると、周囲の誤解を受けて悪いうわさを流されてしまうものだ。
- イ 人は他人の行いを気にしていないようであるが、実は注視しており、うわさ話の材料にしたがるものだ。
- ウ 人は自分の行いに過ちがないように気をつけないと、後の世のうわさ話にまで名が上がることになる。
- エ 人は常に自分の行いを反省しなければならず、その姿勢は来世に生まれ変わる際に重要になる。
- オ 人は何事にも控えめであることが重要で、目立たずにいれば後世の人々から称賛されることになる。

問題は以上です。

